

5 固有値・固有ベクトルと対角化

この章では固有値・固有ベクトル・対角化について学ぶ。この問題ではスカラーが実数か複素数かで議論が変わってくる。特に断らない場合はどちらでも成立するが、実数と複素数で異なる場合はそれを注意する。

5.1 3次行列の対角化

この節では3次行列の場合の対角化について議論する。一般の場合は次節で扱う。

例から始めよう。 $A = \begin{pmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & 1 \\ 1 & 1 & 2 \end{pmatrix}$ とする。 $P = \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & -1 & 0 \\ 1 & 0 & -1 \end{pmatrix}$ とおくと

$$P^{-1} = \frac{1}{3} \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & -2 & 1 \\ 1 & 1 & -2 \end{pmatrix} \text{ なので}$$

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 4 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$

となる。

対角成分以外が0であるような行列を対角行列と呼び、行列 A に対し $P^{-1}AP$ が対角行列になるような P を求め、実際に $P^{-1}AP$ を求める事を対角化という。

対角化には色々な応用がある。ここではべき乗の計算のみを取り上げる。 A の n 乗を計算してみよう。 $B = P^{-1}AP$ とおくと、 $B^2 = (P^{-1}AP)(P^{-1}AP) = P^{-1}A(P P^{-1})AP = P^{-1}A^2P$ となる。以下同様にして $B^n = P^{-1}A^nP$ を得る。 B は対角行列なので

$$B^n = \begin{pmatrix} 4^n & 0 & 0 \\ 0 & 1^n & 0 \\ 0 & 0 & 1^n \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} 4^n & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$$

を得る。よって

$$A^n = P B^n P^{-1} = \frac{1}{3} \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & -1 & 0 \\ 1 & 0 & -1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 4^n & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & 1 & 1 \\ 1 & -2 & 1 \\ 1 & 1 & -2 \end{pmatrix} = \frac{1}{3} \begin{pmatrix} 4^n + 2 & 4^n - 1 & 4^n - 1 \\ 4^n - 1 & 4^n + 2 & 4^n - 1 \\ 4^n - 1 & 4^n - 1 & 4^n + 2 \end{pmatrix}$$

が分かる。

このプリントも含め講義関連のプリントは <http://math.cs.kitami-it.ac.jp/~kouno/kougi.html> においてある。

この例では P は天下りに与えられた。逆にもしこの様な P が存在したとする。 $P = (a \ b \ c)$ とすると, $P^{-1}AP = \begin{pmatrix} 4 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$ より, $AP = P \begin{pmatrix} 4 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix}$ を得る。このとき $(Aa \ Ab \ Ac) = A(a \ b \ c) = (a \ b \ c) \begin{pmatrix} 4 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} = (4a \ b \ c)$ より $Aa = 4a, Ab = 4b, Ac = 4c$ が得られる。逆にこの様な a, b, c で 1 次独立なものが見つければ, 命題 5.1 より行列 $(a \ b \ c)$ は正則である。この変形を逆にたどり P が見つかる。

次の命題は以前扱ったがもう一度述べておく。

命題 5.1 3 項数ベクトル x, y, z が 1 次独立である事は $P = (x \ y \ z)$ が逆行列を持つ事の必要十分条件である。

証明 P が逆行列を持つとする。 $ax + by + cz = 0$ が成立しているとする。この式を行列とベクトルの積の形で書くと $(x \ y \ z) \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix} = 0$ 。この式の左から P^{-1} をかけると $\begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix} = 0$ を得る。

逆に x, y, z が 1 次独立とする。 $P = (x \ y \ z)$ に階数は 3 である。よって任意のベクトル b に対し $xx + yy + zz = b$ は解を持つ。 $b = e_1$ とすると $e_1 = a_{11}x + a_{21}y + a_{31}z$ となる a_{11}, a_{21}, a_{31} が存在する。同様に $e_2 = a_{12}x + a_{22}y + a_{32}z, e_3 = a_{13}x + a_{23}y + a_{33}z$ なるスカラーが存在する。このとき $Q = (a_{ij})$ が P の逆行列を与える。 ■

定義 5.2 行列 A に対し, スカラー λ と 0 でないベクトル x が存在して, $Ax = \lambda x$ となる時, λ を A の固有値 (eigenvalue, proper value) と言い, x を (λ に属する) A の固有ベクトル (eigenvector, proper value) と言う。

$$W(\lambda) = \{x \in K^3 \mid Ax = \lambda x\}$$

を λ に属する A の固有 (ベクトル) 空間 (eigenspace, proper subspace) と言う。

$\Phi_A(t) = \Phi(t; A) = \det(tE_n - A)$ を A の固有多項式 (eigenpolynomial, proper polynomial) といい, 方程式, $\Phi_A(t) = 0$ を A の固有方程式 (eigenequation, proper equation, characteristic equation) という。また, この方程式の解を特性解 (characteristic root) をいう。

命題 5.3 固有方程式 $\Phi_A(t) = 0$ の解 (特性解) が K に属していれば A の固有値である。逆に固有値は固有方程式の K における解である。

この命題は次の補題からすぐ出てくる。

補題 5.4 $\det(B) = 0$ という事は, あるゼロでないベクトル x が存在して $Bx = 0$ となる事の必要十分条件である。

証明 (1)(\Leftarrow) 対偶を示す。 $\det(B) \neq 0$ の時系 4.15 より逆行列が存在するので $Bx = 0$ の左から B^{-1} をかけると $x = B^{-1}Bx = B^{-1}0 = 0$, よって O.K.

(2)(\Rightarrow) $B = (a \ b \ c)$ とおく。命題 5.1 より a, b, c は 1 次独立ではない。よってすべては 0 では

ない実数 x, y, z が存在して $xa + yb + zc = 0$ となる。 $x = \begin{pmatrix} x \\ y \\ z \end{pmatrix}$ とおき，これを行列の形に直

すと $Bx = 0$ が得られる。 ■

命題 5.3 は補題において $B = tE_n - A$ と考えるとでてくる。 K が複素数の場合，解はいつでも複素数であるから，特性解はいつでも固有値である。実数の場合特性解が実数なら固有値，そうでなければ固有値でない。

演習問題 5.1 次の行列の固有値・固有ベクトルを求めよ。

$$(1) \begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 0 \end{pmatrix} \qquad (2) \begin{pmatrix} 1 & 2 & 3 \\ 2 & 1 & 2 \\ 3 & 2 & 1 \end{pmatrix}$$

$$(3) \begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 \\ 0 & 1 & 0 \\ 1 & 0 & 0 \end{pmatrix}$$

命題 5.5 3 次行列 A が対角化可能である必要十分条件は 3 個の 1 次独立な固有ベクトル u_1, u_2, u_3 が存在する事である。この時， $P = (u_1 \ u_2 \ u_3)$ とおき， $Au_i = \lambda_i u_i$ ($i = 1, 2, 3$) とすると，

$$P^{-1}AP = \begin{pmatrix} \lambda_1 & 0 & 0 \\ 0 & \lambda_2 & 0 \\ 0 & 0 & \lambda_3 \end{pmatrix} \text{ が成立する。}$$

証明 u_i を λ_i に属する固有ベクトルとする ($i = 1, 2, 3$)。一次独立な u_1, u_2, u_3 が存在するとする。

$$AP = A(u_1 \ u_2 \ u_3) = (Au_1 \ Au_2 \ Au_3) = (\lambda_1 u_1 \ \lambda_2 u_2 \ \lambda_3 u_3) = (u_1 \ u_2 \ u_3) \begin{pmatrix} \lambda_1 & 0 & 0 \\ 0 & \lambda_2 & 0 \\ 0 & 0 & \lambda_3 \end{pmatrix}$$

が成立する。命題 5.1 より逆行列 P が存在するので O.K.

逆に A が対角化可能であるとき， $P = (u_1, u_2, u_3)$ を A を対角化する行列，即ち $P^{-1}AP$ が対角行列とする。対角行列 $P^{-1}AP$ を $\begin{pmatrix} \lambda_1 & 0 & 0 \\ 0 & \lambda_2 & 0 \\ 0 & 0 & \lambda_3 \end{pmatrix}$ とすると， $A(u_1, u_2, u_3) = (\lambda_1 u_1, \lambda_2 u_2, \lambda_3 u_3)$

となるので u_i は固有ベクトルである。 P が逆行列を持つので u_1, u_2, u_3 は 1 次独立である。 ■

演習問題 5.2 次の行列を対角化せよ。

$$(1) \begin{pmatrix} 2 & 1 & 1 \\ 1 & 2 & 1 \\ 1 & 1 & 2 \end{pmatrix} \qquad (2) \begin{pmatrix} 0 & -2 & -1 \\ 1 & 3 & 1 \\ 2 & 2 & 3 \end{pmatrix}$$

$$(3) \begin{pmatrix} -1 & -2 & -1 \\ 1 & 2 & 1 \\ 2 & 2 & 2 \end{pmatrix}$$